第三百七十四回　青葉会

平成二十九年五月二十五日（木）　井の頭公園吟行

午前十時吉祥寺駅北口　はな子像前集合

午后一時半～四時　御殿山コミュニティセンターにて句会

〈顧問〉☆川合万里子　先生

〈選者〉◎川口孤舟

〈出席者〉今井紀久男　大林猛　柿崎忠彦　川合万里子　川口孤舟　小西弘子
豊田ゆたか　山崎亜也　山田けいこ　山内天牛
伊賀山そらお　土谷堂哉　古田昇　宮内規雄

〈投句〉

《互選句》

六点

☆空つぽの象舎卯の花腐（くた）しかな　孤舟（紀・万・弘・亜・け・天）
武蔵野の緑雨といふはやはらかき　仝（猛・忠・弘・ゆ・亜）

五点

◎カピパラの鼻ピクピクと風薫る　忠彦（孤・弘・天）
追悼の泪緑雨のはな子像　孤舟（紀・猛・天）

三点

◎山法師象舎に残る鉄の環（かん）　弘子（孤・亜・天）
蜘蛛の糸弁財天の池よぎる　天牛（紀・ゆ・け）
卒寿祝（ほ）ぐ水やうかんや句の仲間　紀久男（忠・ゆ）
冷酒（ひや）旨し吟行半ばに誘はれて　仝（猛・忠）
◎緑苔背負いて亀は幾星霜　猛（孤・ゆ）
（水族館の咬みつき亀）

二点

◎はな子像さがしあぐねて五月雨に　仝（孤・ゆ）
路地閑（しず）か春の揚羽に追ひ越され　万里子（け・天）
☆青鷺の一本足の羽繕ひ　孤舟（万・天）（先生の特選）
☆道変へてまた同じ人木下闇　弘子（忠・万）
◎袋角（ふくろづの）葉の風音に耳立てる　仝（孤・亜）
◎雨上る青葉青葉の小径かな　けい子（忠・孤）
夏の蝶ぶつかりそうに去つてゆく　仝（紀・天）
◎悪戯の現場みつけし蝸牛　天牛（孤・ゆ）
大輪の白薔薇一本陽を弾く　そらお（け）
☆吟行に揚羽案内（あない）の弁天堂　紀久男（万）
（☆…「に」→「へ」）
薄暑かな伊勢屋の牛丼ジャズ流す　仝（弘）
◎真白にはな子舎照らす山法師　忠彦（孤）
冷酒持ちはな子舎前でまず献杯　仝（紀）
春浅き曇月（どんげつ）仰ぎ米寿かな　万里子（紀）
地震（なゐ）止むや小鳥の交す声繋（しじ）に　仝（紀）
回るまはる緑蔭のティーカップ　孤舟（弘）
青葉風師と向ひ合ひ句帖解く　弘子（忠）
☆初鰹土佐の伯父貴の二升酒　堂哉（万）
追憶の佐久の草笛小諸城　仝（亜）
鳥鳴くや小枝を渡る若葉風　ゆたか（猛）
若葉映ゆ朱（あけ）の社や洗銭　仝（け）
はな子像前に集ふや青葉の会　仝（弘）
◎鶯や艶おとろえず老の声　仝（孤）
新緑や日本列島リニューアル　昇（猛）
籐椅子に仰臥し何も思はざる　規雄（亜）
ステレオ聴く独身貴族籐寝椅子　仝（紀）

つづきは句会報へ

平成二十九年六月十四日　　紀久男記

十薬や花なき木立ちにほの白く　　亜也（猛）
えごの花雨天は休みの茶店かな　　仝（天）
一人来て弁当つかへば梅雨近し　　仝（紀）
☆　青葉雨水面をゆらし人を待つ　　けい子（万）
◎　五月闇弁天堂の赤い屋根　　仝（孤）
ただ三株カルミヤの花まっ盛り　　天牛（ゆ）

●次回青葉会
六月二十二日（木）午后五時半～八時半　　文京区民センター
▲当季雑詠五句　投句二句

以上・文責　　紀久男

平成二十九年五月句会報

一　恒例となりつつある五月の井の頭公園吟行に御近所の万里子先生以下１０名参加。
生憎の小雨で集合場所の吉祥寺駅北口にあるはな子像（去年の吟行当日に惜しまれて死去したタイ象の銅像を同公園１００周年記念に武蔵野・三鷹両市が建立。子供の日に完成したばかり）前に定刻に三人だけ。雨の上がって１０時半に六人となり出発しました。名古屋からのけい子さん（本降りだった由）も張り切って途中参加されましたが、残念乍ら正明さん、くに子さんは出席叶わずでした。
句会場で孤舟さんの新刊「自註現代俳句シリーズ１９・川口襄集」（俳人協会５月８日￥１，２００）と小生編集（忠彦さんがワープロ原稿作成）「樂屋句会」を出席者へ配布。そして弘子さんら５人の萬緑誌編集委員の「萬緑合同句集５」（三月末解散した萬緑発行所。５月発送）（川合絹漱先生ら物故者含む５００余名。各１２句掲載）及び松浦加古さん（丸紅飯田ＯＧ。「蘭」名誉主宰）寄贈の「自註現代俳句シリーズ１８・松浦加古集」（俳人協会５月１５日￥１，２００）を回覧し乍ら開始。猛さんの披講で、御覧のように孤舟選者が高得点でした。
お元気な先生から地元の老舗・俵屋の山の芋饅頭「御召列車」、けい子さんから名古屋で高名な紫屋の水羊羹、亜也さんから俵屋の黄粉餅、天牛さんからおつまみ、忠彦さんの純吟「〆張鶴」、小生の「越乃寒梅・灑」等々、寄贈あり甘辛両刀の至福。健啖ぶりを発揮され全部平らげました。
最後に先生へ卒寿祝の羊羹一棹（俵屋）贈呈して閉会。二次会は亡き小池治さんいきつけだった伊勢屋の焼き鳥。

二　関係者近詠（四月度分）

真鱈愛づ海無し県の山育ち　　万里子
鱈を入れ精進料理に味近し　　仝
干鱈の塩分もて足る野菜鍋　　仝
似て非なる建国記念日紀元節　　仝
教育勅語今は何処か建国日　　仝
建国日とて戦後不開の奉安殿　　仝
三日月と明星の間へ艦載機　　仝
蕾あまたに原種シクラメン誕生日　　眞希子
ちゃんちゃんこ物持よきを断捨離へ　　仝
白息で十歳の問ふ死の世界　　仝
手袋を外し反戦プラカード　　仝
夫嫌ふセロリも大事な隠し味　　仝

身を長く横切る能登の雪鼬　　弘子
人日や泣きたくて観るリバイバル　　仝
冬木影人の斑に九段坂　　仝
寒雀遊ばせてゐるお稲荷さん　　仝
先祖返りの犬の遠吠え初日燦　　青史
年始酒口すべらせて泣かれけり　　仝
薺粥妻にさみどり濃きとこを　　仝
日脚伸ぶ老いをよしといふあしといふ　　仝
―「森の座」―　創刊号より
春愁や魑魅魍魎の六本木　　盛雄
―毎日新聞４月１９日兵庫文芸　若森京子の特選
恋猫の片目潰れて戻りけり　　規雄
―「ＮＨＫ俳句」　５月号　　西村和子選

下欄につづく

大観の黒塀屋敷春の月　正明
人気無き爬虫類館花の冷え　仝
春惜しむ竹久夢二美術館　仝
神保町の老舗和紙店燕来る　仝
集落は水田の中や桃の花　充章
初蝶来見知らぬ土地へ来たやうに　仝
飾りたる兜も共に傘寿かな　仝

三　「萬緑合同句集5」より　故川合絹漱

活けられてなほ丈伸ばすチューリップ　恵洲
参籠の式部ゆかしや桜散る（石山寺）　堂哉
雛店の主人を偲ぶ初日かな　紀久男
（吉徳の先代会長）
春めくや京屋へ掛ける友の声　仝
花を愛で句にも詠まんと昼うたげ　仝
今日主役こまっしゃくれた一年生　仝

眩きが煙草火となる蚊帳の人
風鈴の鳴り止まぬ夜の静かかな
山茶花や父の黙愛承けつぐべし
生くることそは急ぐこと師走の川
嫁きし娘の手擦れの辞書や秋立ちぬ
咲く古梅何れの国語も智慧深し
芝の花多言を要することは嘘
水馬見えざる方も水輪生む
噴水の穂の千態や師句さまざま
女子大に落花未踏の径ありて
割付のやりくり終へし十三夜
都心てふ燈の海の底鴨眠る　川合万里子

師墓洗ふ愛こそ勇気を生む熱さ
冬の空こんなに青く夫逝けり
熟睡子へ枝垂桜の洩日揺れ
手書きゆゑ名無し賀状を見飽かぬも
人種超え児らの歯白し雛祭
蟬逃がし木登り猫の降りられず
木戸を出る蟇連れ戻す夕まぐれ
兄ちやんを落葉へ埋める姉妹
嬰を抱いて見えぬものから逃げる夏
林檎もて永久の愛授受詩句羨し
旋毛まで草の実だらけかくれんぼ
校庭を球と力走日脚伸ぶ　安部眞希子

燈に狂うかなぶんの声立稽古
焼芋を今日の新聞に転がして
紫蘇の香や主婦の十指が継ぐ家風
孤児院を去る軽き荷に卒業書
団塊の世代やバナナの房眩し
自問して自答は祈り花ゆすら
爽やかに自転車と一体仕事得し
姫女苑受洗し加速の一週間
錆びながら働く自転車チューリップ
月に読む旧約人のダビデの詩
初泣きをどうなだめても母を追ふ
大きな手小さな手バザーの餅係

鉄橋を渡ればここもみかん山　小西弘子
正論であるほど疎し冬の雷
看取りなど無かったやうにつくつくし
炎昼や仁左衛門なら会ひにゆく
切取り線どほり切らねば雲の峰
椎茸のずるりと厚き中華街
苺煮る魔女のごとくに鍋覗き
あとは待つ巌流島の女郎蜘蛛
決闘はせねば生きねば新松子
摘蕾のラジオくぐもる桃畑
ギンガムのクロス立夏へ振り展ぐ
琺瑯の鉢へ琉金移さるる　五十青史

祈らねば祈らねばとて初詣
また妻に先を越されし初音かな
花冷えのたうとう小雪舞ふほどに
払うても離れぬ虻のやがて愛し
端居とふ殻あり殻に閉ぢこもる
柿若葉見上ぐる妻にみどりの斑
飛魚の羽畳まれて売られけり
ふるさとのこれがふるさと草いきれ
あの海にいま鎮魂の濃霧かな
落葉には落葉溜りといふ居場所
昼まではもたぬ氷の張りにけり
妻の背のとどかぬところ年用意　今井東紀

眼福や女形二人の春の舞
初芝居はね髭の意休と呑み交わす
春惜しむ歌舞伎座最後の出番かな
猿翁の黒衣は中車汗涙
節分や弁慶役者遂に逝く
柿落し成田屋居らぬ花の冷
浴衣着て短冊書ける三津五郎
車座に鮓桶かこむ楽屋かな
小気味よきその芸継ぐは誰そ朧
小春日や横文字街に紅の店
鈍行に法然を読む冬日ざし
熱燗や蕎麦屋を句座に真砂町